



「上海特急」
(1932年 アメリカ)
発売：アイ・ワイ・シー
価格：3,675円(税込)

今回は、一九三二年公開のアメリカ映画「上海特急」を紹介する。この映画は、一九三〇年ジョセフ・フォン・スタンバーグ監督の「嘆きの天使」でブレイクしたマレーネ・デイトリッヒが「モロッコ」・「間諜X27」に出演した後、同監督の下で撮ったもので、デイトリッヒの魅力が溢れている。オールドファンは、良くご存じのことと思うが、マレーネ・デイトリッヒは、第二次世界大戦前、その強烈なセックスアピールで良く知られた女優である。と言ってもグラマラスではなく、何処か投げ遣りな世紀末的雰囲気と漂わせ個性が際立っているという意味でのセックスアピールである。しかし、風貌とは異なり、ドイツ人であるがナチズムを嫌悪し、ヒトラーが政権を取るとアメリカに亡命、戦争中も一貫して第三帝国を批判していた大変気骨のある女優であった。また交友関係も多彩で、ジャン・ギャバンをはじめ数々の男優との交際で浮名を流したが、男優だけではなく、女性シャンソン歌手のエディット・ピアフの友人であったことが最近の映画で紹介されている。ストーリーは、グランドホテル形式の変形であり、上海行きの列車に乗り

鉄道と映画 — 23

北京から上海に向かう特急列車。
昔の恋人と遭遇した上海リリーは…。

Shanghai Express

「上海特急」



文・羽生次郎

text by Jiro HANYU

1946年東京生まれ、69年東大経済卒、同年運輸省入省、人事課長、運輸審議官等を経て、2002年8月国土交通審議官を退官。現在は財団法人運輸政策研究機構・会長を務める。フィルム・コミッション(FCC)への取り組みなど、映画へ深い情熱を注ぐ。

合わせた男女が、内戦中の中国で革命派と政府の戦いに巻き込まれる物語である。ゲリラ部隊に列車は占拠され、乗客は人質となり、命が危険にさらされるが、そこは当時のアメリカ映画のこと、最後はハッピーエンドとなる。デイトリッヒは、本名マデリン、今は上海リリーと呼ばれる一見海千山千の女を演じている。この列車で、上海リリーは昔の恋人と遭遇、この二人を軸に物語は展開するのであるが、最初の再開の場面が中々の出来である。昔の恋人が結婚したのかと聞くと、「二人の男では、上海リリーにはなれないわよ」とデイトリッヒが皮肉っぽく、投げ遣りに、ゆっくりとした調子で答える。そのセリフが実に印象的で魅力的であり、デイトリッヒファンであれば、この場面だけでこの映画を見る価値があると言っているのではないと思う。この覚めた上海リリーが、昔の恋人と北京から上海の鉄道の旅の間に数々の困難を乗り越え、ついに元のマデリンに戻るというストーリーは、余りに定型化しているのではないかと批評することもできる。しかし、デイトリッヒの出演した映画の多くもそうであるように、最初は冷たく、強い性格の女性として現れ、男性との付き合いが深まるにつれ、思わぬ純情を垣間見せるというお得意のパターンがこの映画では完璧に成功しているので、ストーリーの展開が鼻につくことはない。もうひとつこの映画の見所は、アカデミー撮影賞を取ったことからも分かるように、当時の中国の幹線鉄道の様子を上手に撮られていることである。多分ロケではなくセットで撮ったと思えるが、鉄道駅の模様や当時の一等車の豪華な様子、さらに列車が街中のスラムのような場所を走り、線路上の牛に難儀する場面など良く撮れている。

蛇足になるが「上海特急」は、デイトリッヒの主演作品中最大のヒット作品であり、そしてこの時期、監督のスタンバーグとデイトリッヒは相思相愛の仲。従って、デイトリッヒを最も魅力的に撮ったと言われているが、筆者は「モロッコ」の方が良いと思う。